

## 【土曜日のH（殺伐受け攻め反転話）】

1

鷹司秀は、根っからどうかしている。

その辺の道端で見かけただけの女に、一目惚れをするまでもなく、その惚れた相手の意思を無視して拉致及び監禁（そして頻繁な強姦）を行い、そうして手元に置いた女を抱きしめて「心底僕は幸せ者だ」と満ち足りたため息をつくのだ。

よく問題なく社会生活を送れてるなこいつ。

拉致された側である私はいえ、この当たり前に司法を無視してくる男の用意した地獄から、どうやって逃れようかとずっと考えを巡らしていた。

私を愛していると言いながら、気に入らないことがあれば行われる脅迫。

直接の暴力こそないものの、目の前で物を壊されたり凄まじりするのは十分に恐怖だった。

このまま奴の監禁下にいれば、いつか殺される。

精神と肉体、どっちが先にイカれるかはわからないけれど。

こんな頭のネジが飛んだ男に拉致された挙句、小学生が盛り上がりだけで飼って死なせるクワガタみたいな一生は送りたくない。そういうのは五年生の夏休みまでに済ませとけ。

絶対に、潰されてなるものか。

そんな思いを鷹司秀に強姦されるたび新たにし、そしてどうにかこの状況を打開できないかと様々な手を試した。

結果、ひとつ分かったことがある。

「あつ…はあ、ん、あ、あつ…」

鷹司秀が喘ぐ。

ソファに座ってテレビを見る私の、足元で。

スラックス越しに踏まれている熱杭は、既に一度達しているせいで湿り気を帯びている。

薄型モニターの中で、国際色豊かな登場人物たちが爆発をバックに決め口上を述べていた。

「んんっ…ね、ちゃんと僕のこと…見て…」

私の膝裏に、大きな手が差し込まれる。

映画鑑賞と並行しておざなりにされていたのが不満だったらしい鷹司秀が、太ももに頬を寄せて私を見上げ抗議した。

鷹司秀は、根っからどうかしている。

惚れた女が相手であれば、触れ合えている限り受け攻めどちらでも楽しめる性質らしい。

犯されるのと犯すのと、どっちがマシかは人によるだろう。私にとつては後者の方が、まだ耐えられる地獄だった。

だからこうして、明日観に行く映画の前作を予習しながら鷹司秀をかまっているのだ。

気が逸れていることを適当に謝って、布越しにそれをぐりぐりと踏む。

その雑な刺激が良かったらしく、男の嬌声が部屋に響いた。

ちやうど、画面内の俳優がきめ台詞とともに敵を爆破したところだ。字幕を選んで良かった。

物語は終盤で、目が離せない。

もっと構えと訴える鷹司秀の頭をわしわしと撫でて、あとでねとかわした。

鷹司秀が、テレビの方に憎々しげな視線を向ける。

「こんなくだらな映画……本当に、観に行くの？　僕は仕事で、明日はどうしても外せないのに」

行く。

ずっと楽しみにしていたし、明日は上映最終日なのだ。

本来なら昨日行くはずだった。

鷹司秀の休みに、二人で一緒に観に行く約束だったのだ。

本当に（外出を）楽しみにしていたのに、久々の外出着を見て盛り上がった鷹司秀に抱き潰されて、せつかくの機会を無駄にしまった。

私は泣いた。

幼児もかくやというほど泣いた。

監禁されて今までで、一番激しく泣いた。

鷹司秀の同伴が条件とはいえ、まさかの外出許可に有頂天だった分、絶望は深かった。

見たことないくらい号泣する私を見て、さすがの鷹司秀も焦ったらしい。

奴の側近であるらしい黒服を二人つける条件ではあったけれど、私は上映最終日の映画を観に行く権利を勝ち取った。

ちなみに彼らはすぐ取り出せる場所に、いざと言うとき私を昏倒させるための自動注射器を隠し持っているらしい。職質に遭え。

職質にあったところで、揉み消されるだけの可能性も高いけれど。

逃亡は難しいにせよ、鷹司秀抜きのお出かけというのは何がなんでも達成したいイベントだった。

爪先を使って、鷹司秀の股間を揉む。

体液で色が変わってしまったストラックスが、また湿り気を増した。

いい子で送り出してくれたら、帰ってきた時に何かご褒美を考えとく、と言うと鷹司秀のたれ気味の目が露骨に輝いた。

「あ…はあ……んんっ、ご褒美？ ……本当に？」

ほんとほんと。

映画見た帰り道で、適当になんか考えとくから。

ご褒美という響きが気に入ったらしい鷹司秀が、うっとりとした視線を漂わせる。いつかどうにかして、この地獄を抜け出してやるからな。

映画のエンドロールが上がってゆくのを眺めながら、私は隠しもせずにくソデカいため息を吐いた。